

## 第3章

# 日本盲導犬協会<sup>いま</sup>今昔<sup>むかし</sup> その原点を探る

日本盲導犬協会は、視覚障害者が  
「行きたい時に行きたいところへ自由に行ける社会」を目指して、  
50年間にわたり挑戦を続けてきました。  
幾多の試練や苦難を乗り越え、確固たる理念を現実のものとしてきた  
その軌跡をたどります。

## 第1節

# 日本盲導犬協会の創生期と その苦難の道程



当協会の創生期は、盲導犬育成がわが国初の事業であること、またその志の高さ故か、  
幾多の苦難に直面した時期でした。

それでも苦難から逃げることなく、一つひとつ解決策を見いだし、  
「視覚障害者のために」というひたむきな情熱で前進を続けた歴史でもあります。

設立時の大きな支えであった社会奉仕団体「ライオンズクラブ」は、  
今もよき理解者であり事業パートナーです。



## 高い志の下、発足した当協会

### 日本における最初の盲導犬

日本において盲導犬の研究が始められたのは1935年(昭和10年)前後であり、日本シェパード犬協会(JSV)の相馬安雄常務理事(新宿中村屋2代目社長)らが最初とされています。相馬氏は大学卒業後、政治哲学研究のため3年間のドイツ留学をしていましたが、その際「シェパードの経済的福祉的な社会性」に共鳴し、その研究をしていました。帰国後1933年には、JSVの理事として、訓練部長を務めます。

1938年春には、アメリカからジョン・フォーブス・ゴルドン氏とパートナーの盲導犬オルティが来日し、相馬氏はゴルドン氏と歓談を行いました。これを契機に苦労の末、同年、ドイツのポツダム盲導犬訓練学校から4頭のシェパード犬、「リタ」「アスター」「ボド」「ルティ」を日本に初めて輸入し、失明軍人のために盲導犬として提供されました。その後、十数頭の盲導犬が繁殖・訓練されましたが、戦禍の中、中断を余儀なくされてしまったのです。とはいえ相馬氏は、盲導犬による視覚障害リハビリテーション事業を、今日にあらしめた草分け的存在といえます。(設立発起人会資料より)

戦後、相馬安雄氏、国立東京光明園の松井新二郎氏、JSV会員であった塩屋賢一氏(現・アイメイト協会創設者)らによって盲導犬訓練法の研究が始まり、同時に協会設立の計画が立てられていました。(1965年学校設立委員会議事録より)

1957年(昭和32年)5月、相馬氏は志半ばで逝去されますが、同年9月、松井氏や相馬氏夫人すみ氏らが発起人となり「盲導犬研究会」が発足しました。研究会のメンバーでもあった塩屋氏は、JVS創立60年史に向けた言葉の中で、以下のように述べています。

「仕事として他人の犬を依頼されて訓練することを続けているうちに虚しさを感じはじめました。(中略)JSVの標語にある“シェパードの訓練は実用作業犬の訓練にある”ことにも刺激を受け、訓練することでより実りのあることがしたい、“実用作業犬を育てたい”と考えると、自然と盲導犬訓練に向かっていきました」

そして1957年には、国産盲導犬の第1号、第2号を誕生させます。

### 「日本盲導犬協会」の胎動

現存する最も古い協会の事業報告書によれば、1959年(昭和34年)2月13日に「第1回理事会開催」の記述が残されています。同年3月には、2回目の理事会が開催されており、報告書の最後に「日本盲導犬協会」という名称と杉並区成宗の住所が明記され、当時の役員名簿も残されています。これらの資料から、この頃すでに「日本盲導犬協会」は存在し、財団設立へ向けた動きが始まっていたことがうかがえます。また同年、国立身体障害者更生指導所では、誘導ハンドルの研究が行われていて、このときすでに盲導犬のハーネスについての模索が始まっていたのです。

1961年(昭和36年)には、日本盲人社会福祉施設協議会の加盟団体として「日本盲導犬協会」の記載があり、第9回定期総会出席者名簿には、故相馬安雄氏の子息

である雄二氏と松井新二郎氏の名が記されています。(第4章181ページ参照)

### 財団法人認定へ

「財団法人日本盲導犬協会」の設立において忘れてならないのは、久米権九郎氏存在です。前出の相馬安雄氏と前後して、1923年(大正12年)、建築学研究のためドイツ、イギリスへ渡った久米氏は、滞欧留学5年の間に、ジャーマン・シェパードに親しみをもち盲導犬への関心を深めます。帰国後、久米建築設計事務所を創設、日本動物福祉協会(JAWS)の事業にも協力して、特に盲導犬開発事業を推進しました。久米氏は、JAWS事業の一環として「盲導犬学校設立委員会」の発足を目指します。1964年(昭和39年)8月18日、第1回「盲導犬学校設立委員会」にて、JAWS会長、ライオンズアイバンク協会会長で東京関東ライオンズクラブ(LC)所属の佐藤三蔵氏の協賛を得た後、11月に会を発足、その後、久米氏自身が副会長を務める東京霞ヶ関LCにて、盲導犬による視覚障害者福祉事業を継続アクティビティーとしていくことを決定しました。

久米氏はJAWSを母体とし、LCの後援により、訓練所建設計画と協会設立を並行して行うなど精力的に活動する中、翌1965年7月、志半ばで逝去されました。久米氏が盲導犬育成事業にかけた思いは自身の遺言として次のように遺されています。「私は盲導犬事業の途中で逃げ出すことになり残念です。……(中略)……どうかよろしく頼みます。では、さようなら」

その意志を継ぎ、その後親交の深かった小松貞尚氏

(小松獣医科病院長)が設立委員長となり、JAWSの佐藤三蔵氏を会長とし盲導犬学校設立を継承。また、東京虎ノ門LCの結成にあたり、小松氏が東京霞ヶ関LCより移籍し、霞ヶ関LCの継続アクティビティーを東京虎ノ門LCの継続事業に取り入れます。亡くなった久米氏ご夫人あや子氏、息女の広瀬エミ子氏、さらに塩屋賢一氏も委員として名を連ねていました。さらに歌舞伎役者坂東三津五郎(東京ライオンズクラブ)など熱心な協力者も現れました。

1966年(昭和41年)9月12日、東京ヒルトンホテルにて「日本盲導犬協会設立 発起人総会」が開催され、初代理事長には参議院議員で郵政大臣なども歴任した迫水久常(さこみず ひさつね)氏(東京LC)が就任しました。他役員らの委嘱、事業計画および予算案なども承認され、本格的な盲導犬の育成訓練と正式な訓練士の育成を目的とし付属日本盲導犬学校も併設運営されることとなりました。当協会は所在地として事務局を渋谷区上原に置き、付属日本盲導犬学校は、練馬区関町の塩屋氏の私有地を無償で借り受け、犬舎を建て、実質的な訓練はそこで行うこととなったのです。10月には、20坪2階建ての盲導犬犬舎が完成しました。

1967年(昭和42年)5月には、訓練犬2頭が訓練センターへ入所し「盲導犬学校開校式および入校式」を開催、メディアの注目を集めました。そして迎えた8月10日、当時の厚生省のから認可を受け、日本最初の盲導犬協会として「財団法人日本盲導犬協会」が誕生したのです。相馬安雄氏が構想を描いてから実に30年余の年月を経ての悲願成就でした。



山崎金次郎さんと盲導犬千歳。千歳は輸入犬「ボド」と国内軍用犬(母犬)との子「日本最初の盲導犬」より

#### \*ライオンズクラブ

1917年に米で設立された「ライオンズクラブ国際協会」は有志による地域に根ざした活発な活動を展開する国際的社會奉仕団体。世界各国に支部を持ち、東京虎ノ門ライオンズクラブもその一つ。1925年に開かれた同クラブ国際大会で、ヘレンケラーが「盲人のために暗黒と闘う騎士」になって欲しいと訴えたのをきっかけに、失明予防など視覚関連活動に力を入れてきた歴史があります。なお、長きにわたり、当協会の盲導犬事業を継続アクティビティーとしてご支援くださっているのは東京虎ノ門LCと松江湖城LCです。







盲導犬訓練士の卒業式



1969年(昭和44年)東京都からの盲導犬貸与が開始。美濃部都知事(当時)から犬が手渡されました



盲導犬訓練学校を卒業したユーザーのパレード写真

## 2 訓練士脱退の危機

財団発足の翌年3月には第1回盲導犬学校卒業式が行われ、8人の盲導犬ユーザーが誕生しました。渋谷駅前で行われた卒業記念の街頭行進を行い、東急文化会館(当時)の協力で、会館内で盲導犬ユーザーが買い物する様子がテレビで大きく報道されました。盲導犬学校の訓練士養成所には第1期生4人が入学し、盲導犬の訓練、育成も順風満帆かと思われた1970年(昭和45年)9月、当時訓練責任者であった塩屋氏が職を辞しました。これに従い、養成所の研修生も協会を離れることとなり、事実上訓練士不在の危機に直面することとなったのです。

この半年ほど前の1970年4月、付属盲導犬学校での実質的な訓練を担っていた塩屋氏から理事会へ以下の提案がなされました。(「議事録」より抜粋)

1 財団法人日本盲導犬協会と、日本盲導犬学校を一本化し、財団法人日本盲導犬学校と名称を変更してほ

しい。

- 2 財団法人日本盲導犬学校において一切の盲導犬に関する事務取扱および盲導犬育成訓練を行う。
- 3 財団法人日本盲導犬学校の理事長に塩屋賢一が就任し、学校長を兼任する。

こうした要求に対して理事会は、塩屋氏が個人経営する愛犬学校内に訓練所を置いている現状が不自然であるとし、早急に盲導犬学校を移転させることを決議すると同時に、塩屋氏の提案は受け入れられないとしました。その後も何度か松井理事(当時)を通じて交渉があり「実際に盲導犬の育成訓練に従事していると事務局が他の場所にあることは連絡に不便であり事務の簡素化を目的として事務局を移転したい」と訴えが続き、協会はこれ認めることを決議しました。しかしその後、事務局運営にあたり、双方での意見の食い違いや複雑な財産権問題もからみ、事態が複雑化していきます。

そして1970年9月、常任理事会で正式に塩屋氏の脱退が承認されました。一緒に脱退した研修生4人は、その後塩屋氏のもとを離れ、坂井貞雄訓練士らが中心

となり1971年盲導犬総合センターを立ち上げるも運営は立ち行かず、のちに2人は日本盲導犬協会に復職することとなります。(日本盲導犬協会常任理事会議事録/日本盲人社会福祉施設協議会発行「盲導犬と社会～その受容と拒否の事例集」より抜粋)

当時の訓練施設は、塩屋氏の私有地を借り建設されていたため、日本盲導犬協会はこれを手放し事実上訓練施設を失うという窮地に立たされました。一時は、育成団体としてではなく、盲導犬育成事業全般を支援指導する団体としての道も模索し、地方支部構成を展開し、日本の盲導犬事業の窓口の一本化を目指す意向も示していました。

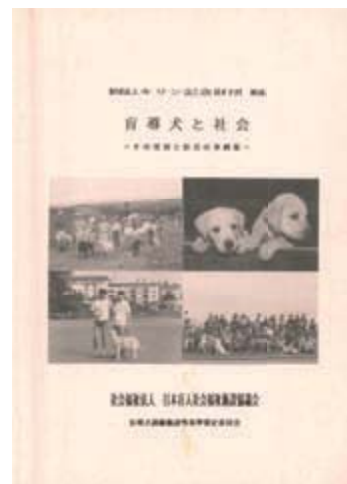
1971年、故久米権九郎氏の息女広瀬エミ子氏が、自宅マンションを事務所兼訓練所として提供し事業を継続します。久米建築事務所が所有するマンションの部屋を確保し、視覚障害者のための生活訓練、盲導犬訓練研究を行う「ハーネスホーム」建設の計画も進められていました。その資金調達のために「1円募金箱」を配布、多くの市民に協力を呼びかけました。

当時このマンションで、共同訓練を行ったユーザー前川花子さん(現・協会6頭目ユーザー)は「マンションの一室で訓練士もユーザーもみんなで手作りのごはんを一緒に食べてね。私たちは広瀬さんのマンションで、訓練士たちは、向かいのビルにある作業員宿舎みたいなところで寝泊まりしていました」と、そのときの様子を語ってくれました。

このように財団法人として日本初、国から認められた盲導犬育成団体として産声を上げた当協会ですが、その運営はいばらの道の連続でした。創生期を支えた多くの人の情熱によって、度重なる危機を切り抜けていきました。訓練責任者離脱騒動から4年後の1974年(昭和49年)2月、ようやく小金井訓練所開設にこぎつけます。その後も借地権の問題に悩まされ、1988年(昭和63年)に再び訓練所移転を余儀なくされます。農家を改築した茅ヶ崎訓練所を開設するも、施設・協会運営の歯車が本当の意味でかみ合ってくるには、1997年(平成9年)神奈川訓練センター開設まで待たなければなりませんでした。



1970年4月の議事録



1円募金活動。1971年(昭和46年)、訓練所を失い、新たな施設建設に向け募金活動をしました